

Document of “MINABI 2020”



「みんなでつくる美術館」 2020 記録集

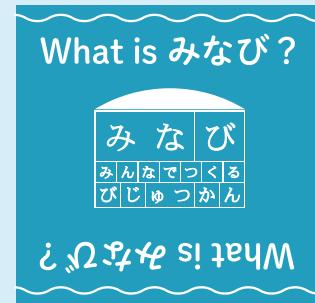


種をまく 世界がひらく
山梨県立美術館
Yamanashi Prefectural Museum of Art





みんなでつくる美術館（みなび）とは、大人も子どもも、障がいのある人もない人も、アーティストも、一般の人も、誰もが自由に参加して、楽しみながらつくり上げる展覧会。今年度で19回目となりました。



毎回の事ではありますが「次年度はどのような内容、方法で活動を展開していくのか」を検討しています。しかし、昨年度末は今まで経験したことがない「コロナ禍」が突きつけられ、その状況において展開していく2020年度の「みなび」でした。2002年からこの活動が始まって以来、様々なテーマのもとに「集い関わり表す」ことが行われてきました。しかし「それができない! 繼続か中断か!」「どうしたら?」世界中においての共通課題「withコロナ」をテーマとして、実行されてきました。そして「ピンチはチャンス」を、1年経った今、新しい試みが実行されてきたことを実感しています。具体的な内容については、この記録集に示されていますので、是非ご覧ください。

もうしばらく続くこの状況はまだ楽観視はできませんが、当たり前ができない中で、生活を営む上での大切な事を考える機会にもなったと思います。いろいろなキーワードが生まれましたが、その中に「ステイホーム」があります。「集う」に対して、その基本である「個」の視点がそこにはあります。「まず一人の思いがあり、それが集うことにより、様々な花が咲く」そんな様子を実感する内容となったのではないかと思います。この様な状況下で、企画から運営に関わっていただきました皆様への感謝を添えて、今年度の記録集を発行させていただきたいと思います。今後もご協力ご支援よろしくお願い申し上げます。

みなび副実行委員長 伊藤美輝(山梨学院短期大学保育科教授)

2020
みなび
テーマ

自分の家を見てみよう!

今年度は、昨年度に引き続きメインゲストに美術家の村上慧氏を迎えて、初めて「みなび」をウェブ上で開催しました。

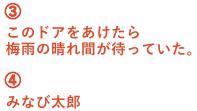
①『ドアノブ採集ワークショップ on the Web 「このドアをあけたら』』をお家でできるワークショップとして、実施しました。

「人間はドアを開ける動物です」(村上慧)の言葉を受け、ドアの先に何があるのか、何があつて欲しいのか。送っていただいた画像をまとめ、美術館ホームページ、みなびインスタグラム上で随時展覧会を開催しました。

●ワークショップ内容

次の4点を、美術館のメールアドレスかみなびインスタグラムのアカウント宛に送ってもらいました。

- ①ドアノブの画像
- ②ドアの向こうの画像
- ③「このドアをあけたら」で始まる文章
- ④名前もしくはペンネーム



④
みなび太郎

●ワークショップ期間：2020年7月末～11月末

●投稿作品数：117点

②『「このドアをあけたら」展 with 村上慧』で、美術館に寄せられたワークショップの作品を来館者に見える形で一挙公開し、村上氏のメッセージや、この期間に村上氏が制作した作品などを紹介しました。

●会期 2021年2月9日(火)～3月21日(日)

●場所 ギャラリー・エコー(美術館エントランス)

●関連イベント 2月9日(火) 「雨宮国広(縄文大工)×村上慧 トークショー」

③ みなびテーマソングを募集しました。

●応募楽曲数：54

村上慧 むらかみさとし

2019年度、2020年度「みんなでつくる美術館」のメインアーティスト。

1988年、東京に生まれる。2011年、武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。2014年4月より自作した発泡スチロール製の家に住む〈移住を生活する〉プロジェクトを始める。2020年には「村上慧 移住を生活する」(金沢21世紀美術館/金沢市)が開催された。その他「瀬戸内国際芸術祭」(2016年)、「風を待たずにー村上慧、牛嶋均、坂口恭平の実践」(熊本市現代美術館/2017年)、「東アジア文化都市2018金沢 变容する家」(金沢21世紀美術館)などに参加。2016年、第19回岡本太郎現代芸術賞(TARO賞)入選。2017年、文化庁新進芸術家海外派遣制度によりエレブラー(スウェーデン)に滞在。著書に『家をせおって歩く』(福音館書店/2019年)、『家をせおって歩いた』(夕書房/2017年)などがある。

Who is 村上慧?

みんなでつくる美術館2020を考える



2020年5月24日

初めまして。昨年（2019）「みなび」のワークショップ等に参加いただいた方はお久しぶりです。今年も「みなび」にゲストアーティストとして関わらせていただくことになった村上慧と申します。いま2020年5月24日日曜日で、東京都三鷹市にあるアトリエでこの文章を書いています。本当は今日24日に山梨県立美術館にて今年の「みなび」キックオフとなるトークイベントを開催し、みなさんと一緒に、今年の活動をどのようにしていくかという「作戦会議」をする予定でした。しかしこの新型コロナウイルス感染拡大の影響により、トークイベントは中止となり、今年の「みなび」も人が集まらないような形で、オンラインで実施することに決まりました。

昨年のみなびは、「美術館に住む？」というテーマを決め、ワークショップで「家」を作り、それを美術館内に配置することを通して、美術館を自分の場所にしていくというコンセプトがありました。

「住むこと」について考えたことはありますか？僕は自分がどのような世界に住んでいるのかが知りたくて、家に関する作品をいくつか作っています。発泡スチロールの家とともに移動し、敷地を借りながら生活するプロジェクト《移住を生活する》や、内部に居室のある看板を作って、そこで広告収入を使って暮らす《広告看板の家》などがあります。

昨年度の「みなび」は、そんな過去の作品を踏まえて企画したものでした。多くの方に参加いただき、楽しいプロジェクトになったと思います。しかし大人数で集まることが難しくなった今思うのは、ワークショップの中身も然ることながら、参加者のみなさんのが家を出て、山梨県立美術館という会場に移動し、他の参加者と同じ空間で作業をして、終わったら家に帰るという一連の流れが重要だったのだろうなということです。それが「みなび」を豊かなものにしていました。人が大人数で集まることが叶わないこの状況で、みんなが家に居ながらそれぞれにワークショップを行い、あの経験を生み出すためにはどうしたら良いのか、実行委員会の皆さんと考えました。そして今年は「自分の家をよく見てみよう」というコンセプトで「みなび」を行うことにしました。



《移住を生活する》(2014~) 撮影：内田涼



《広告看板の家 高松市美術館》(2019) 撮影：木奥 恵三

ここ2ヶ月間ほどの外出自粛ムードの中、家で過ごす時間が増えた人は多いと思います。僕は料理をする機会が増えました。ジャガイモなどを育てたりもしています。基本的に、家はそうやって色々なことをして「過ごす」場所で、家そのものについて考えるためには、一度立ち止まる必要があります。家で「過ごす」ことは自然にできるかもしれません、自分の家そのものを見る、ということは意識しないとできません。窓の色、ドアノブの形、床や天井の模様、水道の蛇口や照明器具、または屋根や外壁など、いつもも気なく見過ごしていたものを、よく眺めてみてください。

それはどんな材料でできていますか？どこで作られたものでしょうか？自分の家が、多くの人の仕事が集中することによって作られていることがわかると思います。自分の家でさえ、成り立ちを全て解き明かすのは難しいことです。

2021年1月19日

昨年の春以降家にいることが多くなり、ドアノブに触れる機会が少なくなりました。ドアノブに触ることすらためらってしまう世界を生きています。しかし人はドアを開ける動物です。ここではあなたの家のドアノブと、そのドアの先を探集しております。皆さんが住む近所の写真や、家で自由に作ったものや絵など、色々な景色が集まりました。これからも厳しい状況が続くと思われますが、手元にあるひとつのドアノブから、その先に無限に広がる世界を想像してもらえばと思います。

2021年3月13日

今年度の「みなび」は、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大の影響でオンラインでの実施となりました。昨年の5月に「自分の家をよく見てみよう」というテーマを掲げてスタートした「みなび」でしたが、具体的にどのようなワークショップにすれば多くの人に参加してもらえるか、僕はこれまでオンラインのワークショップなど考えたことはなかったので、企画は簡単ではありませんでした。そんななか前年度の「みなび」を振り返って、企画の内容と同じくらいに、人が集まること自体が重要だったのだなと気がつきました。集まるための第一歩は家のドアを開けることだと考え、最終的に「このドアを開けたら」というワークショップになりました。最初はあなたの家のドアノブと外の景色が集まるかなと思っていたのですが、集まった作品を見渡し、結果的に僕の印象に残ったのはオープンのドアを開けたら美味しいそうなドーナツが出てくるような作品など、自分の日常生活を反映したものでした。「自分の家をよく見てみよう」という最初のテーマに帰ってきたような気がします。

この1年間、自分の生活が何によって支えられているのか考えた方は多いと思います。僕はそうでした。普段使っている道具や電気などのエネルギー、食べ物はどこからしているのか、なぜ自分ではそれらを作ることができない世界になっているのか考えました。「縄文大工」の雨宮国広さんとも対談させていただき、たくさんの知見を分けていただきました。このパンデミックの状況を前向きに捉えるためにも、今後も考え続けていきたいと思っています。みなさんも体調に気をつけてお過ごしください。また近いうちに元気にお会いできることを願っています。



「みなび」2019年の様子 撮影：美術館職員

「このドアをあけたら」

ウェブ上で展開したワークショップへの投稿作品は117点でした。その一部を紹介します。
全投稿作品は、山梨県立美術館のホームページ、みなびインスタグラムでご覧いただけます。



みなびウェブサイト

みなび Instagram



「このドアを開けたら」展

with

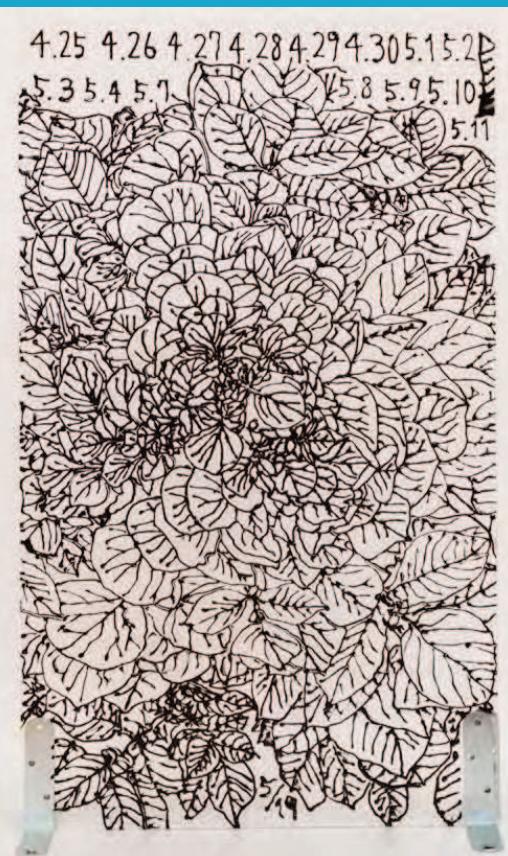
村上慧

2021年2月9日(水)～3月21日(日)
山梨県立美術館 ギャラリー・エコー

ウェブ上で展開したワークショップのまとめの展覧会を開催しました。

展示した村上慧作品の一部を紹介します。山梨県立美術館のホームページでも一部ご覧いただけます。

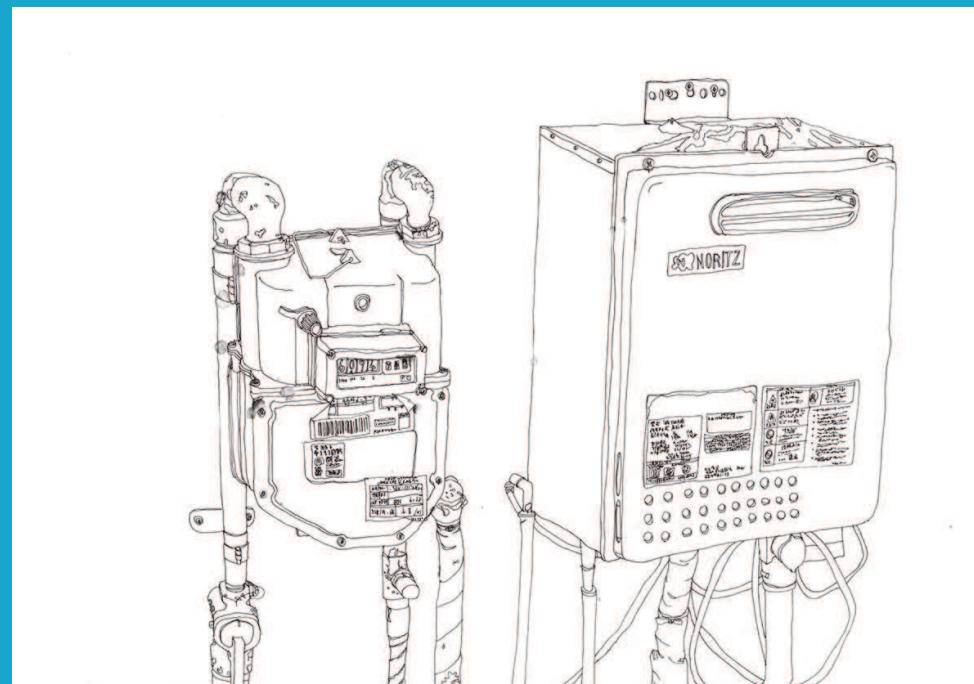
緊急事態宣言下、ステイホーム中に村上はジャガイモを育て、その成長の記録を残し、自身の家のドアを開けた先に見えたものをドローイングしました。



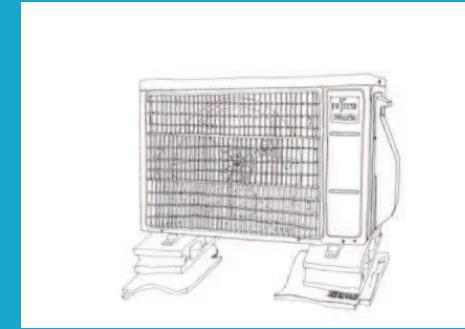
②《東京都三鷹市中原1-11-17 2020.5.1》



③《東京都三鷹市中原1-11-17 2020.5.25》
29.7×21.0cm インク・紙



④《東京都三鷹市中原1-11-17 2020.4.27》



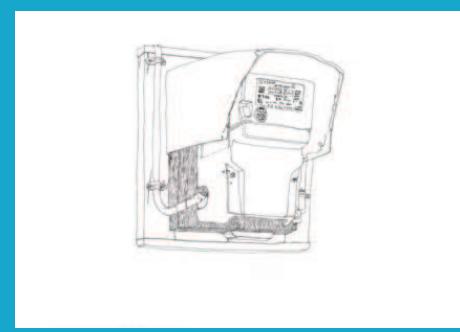
⑤《東京都三鷹市中原1-11-17 2020.4.30》



⑦《東京都三鷹市中原1-11-17 2020.4.29》



⑥《東京都三鷹市中原1-11-17 2020.5.4》



⑧《東京都三鷹市中原1-11-17 2020.4.28》

②、④～⑧ 21.0×29.7cm インク・紙

雨宮国広 × 村上慧 トークショー

石斧でつくる家と発泡スチロールでつくる家、それぞれの家について

2021年2月9日(火)午後1:30～

コーディネーター:伊藤美輝

(みなび実行委員会副委員長、山梨学院短期大学教授)

以下、トークショーの一部を抜粋（…は中略）

全文は、山梨県立美術館のホームページに掲載。YouTubeでもご覧になれます。



トークショー動画(Youtube)

「シンプルだけども、そこに本当の暮らし、住まいがあるんじゃないか」（雨宮）

伊藤:まず、雨宮さん、昨年（2019年）の台湾から与那国島への丸木の舟のプロジェクト（*1）が非常にインパクトがあって、日本人の、本当に原点のところでの物づくりのお話を聞かせていただけるんじゃないかなと。それから、村上さんは、発泡スチロールという人間がつくり出してきた素材を使って色々な活動をする、家を担いで日本世界へ飛び出していく。一見すごく離れているように見えるんですけども、共通性、次の時代をどう在るべきかというところまで話が進んでいくと、このトークショーの意義が生まれてくるんじゃないかなと思います。

村上:僕が雨宮さんの名前を知る前に、国立科学博物館の…道具から自分でつくり、杉の木を切り倒し、舟をつくって、台湾から与那国島に方位磁針を使わないで、天候と星と、見える物だけで、日本に渡った先祖のルートを探るというプロジェクト（*1）をラジオで知って。そうしたらその舟作っている人が（山梨に）いるよっていうのを一昨年のみなびで聞いて。そうしたらトークイベント（*2）に来てくださったんですね、雨宮さんが。僕は発泡スチロールの家をつくり、それを動かして、人の土地を交渉して借りて、そこで寝て…っていう、住所を持ってない家を、どうやってこの定住文明の中で可能かっていうのを探るっていう感じなんですが、雨宮さんの視点は、僕の活動も含めたあらゆる活動を相対化してしまうんですね。発泡スチロールの作り方、僕知らないんですよ。ボンドとか道具を使うんですけど、それ（ボンドや道具は）つくれないです。でも、つくれないことを人から咎められたことはないです。でも雨宮さんは、その資格があるんですよ。家をつくる石斧からつくるてるんで、雨宮さんの前では、あらゆる表現が…意味を持たなくなっちゃって、強力な存在として、立ちはだかるんです。

国広さんのこの本（*3）のこととか、活動を知っている方は、（会場に）どのぐらいいらっしゃるんですか。（来場者挙手）

雨宮:ああ、有り難うございます。

村上:どういう暮らし方かを、ちょっと本人から…。

雨宮:暮らし方は、三畳の小屋で、真ん中に火があって、寝るところがあってという空間です。皆さんとの大きな違いは、毎日お米を食べていないということですね。その他は、スーパーにある物を食べてますし、殆ど同じだと思います。あと本物の火を毎日使ってる。

伊藤:お米を食べないということは…。

雨宮:農耕に対しての抵抗感がありまして。いつまでも農耕は続かないということを想像するわけですね。地球の気候変動もそうですし、周期的にやってくる寒冷化もそうです。そもそも原始時代、なぜ農耕をしなかったかを考えると、やっぱり自然と共に暮らすことが、一番命に繋げていく元だなと思いますね。…

私は大工を32年間やってきましたけれども、今の大工さんは道具や電気、エネルギーがなかったら家をつくれない。柱も床板も、みんな機械がつくってくれて。文明の利器がなかったら何も作れない職人と化しているということですね。原始時代の物づくりになぜ惹かれたかといいますと、自然にあるものだけで、誰でも出来て、持続可能というところですね。シンプルだけども、そこに本当の暮らし、住まいがあるんじゃないかと感じ取ったということですね。

村上:旧石器時代の人たちは縄文時代の人たちよりも、もっと動き回っていたはずだから、舟を作る技術は縄文人よりも高くておかしくなかったと書いてあった気がするんですが。（*3）

雨宮:未知の世界を旅するには、自然観察が常にできなければ、生き残っていけない。文明の利器がなくても、星を見たり、風の向き、潮の流れ、海を飛んでる鳥、あらゆる

ものから、自分たちの位置とか方位とかを読み取れるっていう、どれだけの年月それを観察してきたかっていうことが分かるんですね。そういう素晴らしい知識とか、コミュニケーション能力、文化を創っていた人だなっていうことは感じましたよね。

村上:例えば杉を一本育てるにも、一世代ではぜんぜん無理で、海を渡れるぐらいのりっぱな舟をつくるためには、樹齢が100年とか200年とかという単位で必要になってくるから、…これは絶対に一人ではできないし、平和じゃなかつたらできないと思うんですよね。

「健全な関係が保てる道具の範囲で生活していたのが縄文時代」（村上）

雨宮:現代の大工をして、確かに喜ばれるわけですよ。だけれど、木は泣き、森は泣き、虫たちも動物たちも泣き、みんな苦しい思いになる。そこを知つてみると、やっぱり人間としてやるべき仕事っていうのは、人間のためだけの仕事ではないだろうっていうことを自分は思いましたね。…鉄の道具、機械を握ったことによって失われたものが私の中に実際あります。それは人間らしさ、全てを思いやる優しさを私は忘れていたと思ったんですね。石の道具を使って仕事していると、心が優しくなって、自然と一緒になっている自分がいて、もの凄く居心地がいい。生きている喜びを感じるんですね。

村上:「道具を使う」っていう気持ちではないんですよ。こういうものの（スマートフォン）でも、僕はコントロール下に置いてない。むしろ、携帯電話に使われていて。

この本（*3）に、石斧を最初につくって栗の木を切り、斧を

入れたときにコーンっていう音で心が晴れ渡ったと書いてあって。そのときに自分の道具はこれだと感じられたっていう。つまり主役が人間で、使われてしまったら駄目なんですよ。

伊藤:石斧を一回つくってそれで満足したわけじゃなくて、試行錯誤されて、最後これだっていうものに出会う。職人の世界でも、道具は自分でつくる物だっていうふうに言われますよね。

雨宮:私は、鉄の道具を一生懸命使っていたので、ある程度、道具の能力を感じる技術は身に付いていると思うんです。そういう中で、一回コーンって当たっただけで、その石の能力に、とにかくびっくりした。これだったら何でもできるなって。…

私は鉄の道具を使うのに何十年も修行してきているけれども、それ以上のものがないと、石の道具は使いこなせない。ということは、暮らしが必要としないとそういう技術は生まれないので、そういう物づくりの世界があったということです。これはすごいことです。だけど、子どももつくれるし、誰でも手軽に使える魅力がある。ただ、子どもたちに必ず伝えることは、たとえ石の道具であっても、人間性を失うと凶器になるということですね。人間性だけをしっかりと保つていれば、それは破壊の道具にも凶器にもならないって伝えているんですね。要は、道具ではなくて、人間側の心にあるんですね。その心がしっかりしてないと、しっかりとしたものは生まれないっていうことですね。

…田んぼをつくるために木も切らなきゃならない。石の斧だと、堅い木は中々切れない。石の方が壊れちゃって。鉄の斧は、田んぼをつくるために求められたところがかなりあると思います。

村上:畑を切り開くために鉄の斧がつくられた。石の斧では



ウイルス感染拡大防止対策をして実施 左から 伊藤美輝、雨宮国広、村上慧

それが中々難しかったっていうのは、石の斧が、人間に制約を掛け「これ以上行くとお前ら行き過ぎだよ」ということを教えるという役割を果たしていた。

雨宮：いやー、いいことを言ってくれました。まさにそんなんです！不思議なことに、石の道具を手にして、「どんどん切ってやるぞ」とか嫌な気持ちになるなぜか石斧が壊れたりね、うまく仕事ができなかったりするっていうのは感じますね。畏敬の念を持ち、感謝の気持ち、その木に理解していただき、その命をいただからきやならないわけですから…。でも木は切られたくないと思ってる。その木と心をいかに通わせて、家になり、舟になるということを許してくれて、自分の命を人間側に差し出して与えてくれる…その道具を通して心の交流をしないと駄目なんですね。だから、自然と優しくなるんですよ、人間側も。

村上：島袋道浩さんというアーティストの作品(*4)で、…人が最初に使った道具は石器だろうということで、このスマートフォンぐらいの大きさの石をたくさん集めてきて、本物の石器ですね、あるところに行くとスマホとこの石を交換するんです。3万年経っても人間が手に持てる大きさってこれなんですよ。仮に現代の代表的な道具はこれ(スマートフォン)だけど、3万年前の道具はこれだろうってことで、石を持って、参加者に町の色々なところを巡回させるんです。これは人の体験談の話だけど、ネットに繋がってない不安感が来るかと思いきや、石を持ったら、石を持っているときの人間が生まれるんですよ、そこに…スマートフォンっていう道具をいつも手にしているから影響されている問題もあるし、これを手放して石を持ったときに、アフェクトされる何かがあると気付かせる作品だったんですね。雨宮さんの話もそうだけれど、石斧

を振って「これ以上やつたら駄目かも」とて人間の方が思ったり、石の方からブレーキを掛けたりするっていうことが起こるじゃないですか。…健全な関係が保てる道具の範囲で生活していたのが縄文時代までの人たちだったし、それを超えてしまってから、どっちが道具かわからなくなっちゃったのかな…。

伊藤：道具とコミュニケーションをとる力だと思うんですよね。現代、これから先どうであるかっていうことのヒントが今お二人の中から出てきたと思います。…もう一度自分の感覚で色々なものと関わってみましょうっていうことかな。それを実践的にされているのが雨宮さんであって、村上さんも本当に自分の体を使って色々なものを計測されている感じを受けます。

- *1 「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」2019年 国立科学博物館
- *2 「村上慧氏トークショー」2019年 山梨県立美術館
- *3 「ぼくは縄文大工」2020年 雨宮国広著 平凡社新書
- *4 「携帯電話を石器と交換する」2014年 島袋道浩 札幌国際芸術祭



雨宮国広（あめみやくにひろ）

1969年山梨県に生まれる。縄文大工、建築家。丸太の皮むきアルバイトをきっかけに、大工の道へ進む。2009年に石斧と出会い、能登半島の真脇遺跡で縄文住居の復元に携わる。その後、国立科学博物館の日本人のルーツをたどる「3万年前の航海徹底再現プロジェクト」では、台湾から与那国島へ渡る丸木舟を作成した。現在は手道具のみで自作した小屋に住む。



みなび みんなでつくる びじゅつかん

山梨県立美術館で2002（平成14）年度に始まった参加型展覧会「みんなでつくる美術館（みなび）」。大人も子どもも、障がいがある方もない方も、だれでも関わることができる本事業は、たくさんのアーティストや参加者、多くのボランティア・スタッフ、そして材料等をご提供くださる様々な企業に支えられ、18年間続いてきました。関わってくださった皆さまに感謝し、また今後の「みなび」の発展を願って、今年度は「『みなび』と言えばあの歌！」と思わず口ずさんで踊ってしまう、元気なテーマソングを募集しました。

みなび テーマソングが決まりました!!

みなび テーマソングに全国各地から、37名（グループ）から、54楽曲の応募がありました。
みんなでつくる美術館実行委員会で厳正なる審査を行った結果、以下の曲をみなび テーマソングとして採用いたしました。（2020.7.18）

楽曲タイトル「ドキドキワクワクみなび」

作詞・作曲 Childhood (山梨県)

Childhood

山梨県を中心に音楽活動を行っている、3人グループ。ライブやコンサート、CDアルバムのリリース、CMソング制作、舞台・芝居の楽曲提供などの活動のほか、県内外の音楽イベント等で多くの賞を受け、高い評価を得ている。

主な受賞歴・活動

- 2007年 「軽井沢ラブソングアワード 2007」グランプリ
- 2011年 「富士の国やまなし国文祭イメージソング公開コンテスト」最優秀賞（その後、公式テーマソングとして採用）
- 2015年 舞台『HAPPY』公演（コラニー文化ホール・現 YCC 文化ホール）
- 2016年 甲府市立甲斐小学校オリジナル卒業ソング『みんなのうた』（6年生とともに制作）
- 2017年 山梨県立リニア見学センター公認のリニアテーマソング
- 他多数



楽曲を聴こう! (YouTube)

☆美術館ホームページからダウンロードして聴くことができます。

◎最終選考に残った曲は以下の4曲です。

- 「みんなでみなび」 MiyaB (東京都)
- 「みなびマリンバ」 秋葉 修 (埼玉県)
- 「ドレみなび」 山崎一徳 (東京都)
- 「行ってみよう！みなび」 Childhood (山梨県)



みなび2020を振り返って

小俣 直喜

前年度のテーマ「美術館に『住む』?」をさらに発展させる方向で準備を進めてきましたが、コロナ禍のため、みんなで集まることが一切できなくなりました。メインゲストの村上慧氏と実行委員会では、このような状況下だからこそできる内容を検討するなかで、「自分の家を見てみよう」を新たなテーマとして掲げ、オンラインワークショップ、SNSでの発信などで展開しました。以下、それぞれの内容について振り返ります。

◇「テーマソング公募」

HP上でも告知したため、全国各地から作品を寄せただけた。採用曲は、HP等で発信、「ドア展」の会場で紹介したほか、テレビCMに使用した。また、当館公式YouTubeでも公開した。テーマソングは今後もみんなびワークショップの場などで積極的に活用したい。

・応募数 54曲

◇「ドアノブ探集ワークショップ

on the Web このドアをあけたら」

インスタグラム、メールなど複数の手段で作品を募集した。SNSにより若者層の拡大をねらった。学校、絵画教室からの投稿もあった。

・募集期間 2020年7月～11月30日

・ドア作品投稿総数 117点

・みんなびインスタグラム フォロワー数 92(2021年3月16日現在)

◇「『このドアを開けたら』展 with 村上慧

美術館エントランスに展示。来館者の中には足を止めて観覧する方も多くいた。

・展示期間 2021年2月9日(火)～3月21日(日)

36日(開館日)

・期間中の投稿作品数 13点

◇「雨宮国広氏・村上慧氏トークショー」

感染拡大防止対策のため、対談者と参観者の空間を分け、ビデオ会議システムを使い実施した。録画した映像を当館公式YouTubeで公開した。

・参加者数 12名

雨宮 千鶴

2002年の開始から「みんなでつくる美術館(みなび)」は、様々に形態を変え歩んできました。参加者が、アートを通して様々な人とかかわり、ともに考え感じ、アートそして美術館をより身近な存在として楽しむ一助に「みなび」はなってきたと思います。今までの多くの参加者、これらの「人」とともに成長してきた「みなび」です。

今年度ウェブ上で開催した「みなび」には、目の前に「人」がいません。こちらのワークショップの発信に応えて送られてきた投稿数は、多かったとは言えません。誰もが気軽に参加できる「みなび」をうたつてきましたが、残念な結果となりました。テレビCMも流しましたが、なかなか投稿数は伸びませんでした。それでもテレビや新聞記事、美術館のホームページを見てくれて、「みなび」を気にかけてくれた方はいたと思います。そんな中、投稿作品全てをプリントアウトし展示した「このドアを開けたら」展を見ながら、ある老夫婦が「皆、良く考えるなあ～。これは、孫の絵みたいだ。孫を連れて来るか。」と話していました。観て感じ心を動かしてくれている人がいることに嬉しくなりました。

作品を投稿してくれた「人」、作品を見て「いいね」を押してくれた「人」、ゆったりとした空間の中で投稿作品をのんびり見てくれた「人」、いろいろな「大切な人」がいることに改めて気づくことができた、コロナ禍での「みなび」となりました。今までの「みなび」のように多くの方が集まって繰り広げることは、まだ当分不可能だと思います。みなびは最初から大勢の参加者がいたわけではありません。withコロナと言う新しい時代において、初心に帰り今回気づいた「大切な人」を少しずつでも増やし、「人」とともに進化する「みなび」でありたいと思います。



2020年の「みなび」が、静かに終わりました。このコロナ禍の中、今までとは違った成長があつたと思います。

参加者、陰で支えてくれた協力者の皆様、本当にありがとうございました。

2021年、「みなび」は20歳になります。人間で言うならば成人です。これまでの経験を生かし、大きく羽ばたいていきたいと思います。引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

みんなでつくる美術館実行委員会

2021年3月

みんなでつくる美術館実行委員会

実行委員長 青柳 正規 (山梨県立美術館館長)
副実行委員長 伊藤 美輝 (山梨学院短期大学教授)
実行委員 田中 静男 (書たまご教室主宰)
島津 久美子(山梨県立美術館協力員)
梅津 謙 (美術作家)
中村 伸也 (公立小学校教諭)
小俣 晴美 (河口湖美術館職員)
鈴木 つな (ダンサー)
監事 田中 實 (山梨県立美術館協力員)
事務局長 波多野 秀子((株)SPSやまなし支配人)
事務局 井澤 英理子(山梨県立美術館学芸幹)
高野 早代子(山梨県立美術館教育普及リーダー)
小俣 直喜 (山梨県立美術館普及担当)
瀧澤 智子 (山梨県立美術館普及担当)
雨宮 千鶴 (山梨県立美術館普及担当)
下東 佳那 (山梨県立美術館学芸員)

写真撮影(表紙・p.7) 青柳 茂



ご協力の皆様
(敬称略)

村上 慧

雨宮 国広

内田 涼 (ポスター、フライヤー、ロゴデザイン)

(株)小澤建築工房

(有)ディスプレイ遠藤

テレビ山梨



このドアを開けたら、
あなたは何を想像しますか?

みんなでつくる美術館 2020年 記録集
編 集 | みんなでつくる美術館実行委員 事務局
(雨宮千鶴 小俣直喜)

発 行 | みんなでつくる美術館実行委員会 ©2021

みんなでつくる美術館(みなび) 実行委員会事務局
山梨県立美術館 学芸課内
〒400-0065 山梨県甲府市貢川 1-4-27
Tel: 055-228-3258 Fax: 055-228-3418